「それでは、北上さんと大井さんの、提督とのケッコンを祝しまして……」

大型艦向けの食堂に居並ぶは戦艦と空母、重巡に航巡といったやや年かさの大型艦の艦娘達だ。手に手にグラスを持った彼女たちは、食堂の隅に木箱を並べて作った壇上に立つ重雷装巡洋艦の二人と、傍らで司会をする隼鷹に視線を向ける。

「乾杯!!」

隼鷹のひときわ大きな音頭に合わせて集まった皆が杯を掲げて打ち合わせる。大井もまた隣の北上と軽く乾杯する。

この鎮守府の提督が、大井と北上の重雷装巡洋艦の二人とケッコンカッコカリを行ったのは今日の昼のことだった。突然二人で呼び出しを受け、提督の執務室で指輪を授与された。

本来なら祝い事など予定されていなかったし大井も北上も欲してはいなかった。しかし隼鷹がこれ幸いと大型艦――酒の飲める艦たち――を集めて宴会を企画したのだった。

壇上から降りた大井と北上の周りに集まった艦娘達はめいめいに祝福の言葉を述べ、あらためて乾杯をする。金剛など、提督を職務上の感情以上に好いていることを公言している何人かの艦娘からは軽く皮肉めいた言葉を掛けられ、大井は苦笑をするしかない。

表面的なロマンティックな色彩をはぎ取ってしまえば、ケッコンカッコカリはきわめて練度の高い練度に達した艦娘に与えられる勲章――指輪然としたそれ――を、与える行為でしかないと大井は思っている。そして、普段の装備の選択において艦娘に拒否権や選択権がないのと同様に、ケッコンカッコカリにおいても拒絶は認められていない。

最初は二人で皆の祝いの言葉を受けていたが、宴会が盛りあがるにつれていつの間にか大井は北上から引き離されてしまう。酔いが変な方向に回ったのか泣きながら絡んでくる長門や、断っても断っても酒を注いでくる武蔵の相手でへとへとになり、大井は壁際の空いている椅子に座って一息ついた。

いよいよ宴会は大盛り上がりを見せている。主賓であるはずの自分のことを気にせず騒ぎ始めた周りを見回し、大井は呆れたように首を振る。結局は、楽しみの少ない艦娘としての勤務の中でみんな何かしら口実を付けて騒ぎたいだけなのだろうし、それで良いんだと思う。

「ちーっす!! ねえねえ、指輪あたしにも見せてよ」

「ちょっと鈴谷、いきなり…… 失礼ではありませんの」

「いえ、いいですよ。ほら」

やってきた鈴谷型の二人が大井に絡む。指輪のはまった左手を差し出すと鈴谷は黄色い声をあげて喜んだ。

「熊野さんも見てみる?」

「良いんですか? ありがとうございます」

声を掛けると熊野もその手の指輪を興味深げに眺める。

航空巡洋艦。重巡とは似て非なる別の道を選んだものたち。重巡ほどの火力は持たず、艦載機運用能力は改装前の軽空母に